

ハングル表記と無声歯茎破擦音・有声歯茎摩擦音  
 -韓国慶尚北道高校生の日本語協力授業を通して-  
 Hangul and 「ツ」 and 「ザ」「ズ」「ゼ」「ゾ」

-Through Japanese education at Gyeongsangbuk-do high school in South Korea-

蟹江美幸

KANIE Miyuki

要旨

本研究の目的は、韓国人学習者が苦手とする無声歯茎破擦音「ツ」、および有声歯茎摩擦音「ザ行」について、日本語話者が不自然と感じない発音へと導くための練習方法を見つけ出すことである。学習者の日本語発音の問題点と対策を考えるため、韓国語と日本語の音韻体系、音声の特徴を比較分析し、韓国語を母語とする高校生 91 名に生成調査、355 名に聴取調査を実施した。聴取調査では聞き取ったとおりにハングル表記も求めた。その結果、以下のことが明らかとなった。難易度が高い音声は生成と聴取では異なる。次に、「ツ」の難易度には音環境の影響があり、「ザ行」の難易度には後続母音の影響がある。また単音レベルの難易度も異なる。そして、学習者には聴き取りの基準があり、識別基準としているハングルこそが干渉の原因である。この結果をもとに、「ツ」が「チュ」とならない、効果的練習方法を提案した。

【キーワード】韓国人学習者 無声歯茎破擦音 口蓋化 ハングル 識別基準

1. 背景と目的

韓国語と日本語は文法的にとっても類似した言語であるため、互いに学びやすい言語であるというのが一般的であるが、音声・音韻には多くの相違点が存在するため、学習者は音声習得に困難を伴うことが多い。言語習得研究において母語の影響が最も顕著に表れる領域が音声であり、上級者になっても母語の影響は残りやすく、音声的な誤用によって話者が意図する意味が伝わらなかったり、誤解されたりする可能性がある(戸田 2010)という指摘がある。

韓国人学習者の日本語の発音の特徴は、先行研究においていくつかの項目が挙げられているが、本稿では無声歯茎破擦音「ツ」と有声歯茎摩擦音「ザ ズ ゼ ゾ」を取り上げる。その理由として「ツ」が「チュ」、「ザ ズ ゼ ゾ」が「ジャ ジュ ジェ ジョ」となるような口蓋化した子音は、日本語話者には他の音声の誤用と比べて異なる印象を与えるため、特に注意を要する音であるからである。油谷(2005)も韓国人に対する日本語教育の現場で早い段階での「ツ」と「ザ行」の発音矯正の必要性を述べている。本稿では習得困難の原因を音声音韻から検証し、発音を生成する上で習得困難な音を抽出し、その結果をもとに作成した聴取による調査の結果から習得難易度の原因を突き止め、日本語話者が不自然と感じない、日本語らしい発音の習得を目標とした練習方法につなげる。

## 2. 先行研究

本研究の課題は次のとおりである。韓国人日本語学習者の発音の問題点については多くの先行研究で扱われているが、ほとんどの研究は誤用の原因について、日本語と韓国語の音韻体系が異なるため、母語に存在しない日本語の音を、母語の近い音で代用しているという、日韓比較対照を通した問題点の指摘にとどまり、研究の成果を実際の教育の現場で効果的指導に結び付けた実践研究は少ない。本研究の目的は日本語らしい発音を習得する練習方法を見つけ出すことである。これまでの先行研究を分析することにより研究課題を明らかにし、その課題を解明するために生成、聴取の2調査を実施する。

### 2-1 ザ・ジャ行音の区別

小河原(1996)によれば、学習者は教師が繰り返すモデル発音と、反復している自分自身の発音と同じかどうかを判断することは困難であるが、生成聴取ともによくできる学習者は明確な基準を用いて聴取していることを明らかにした。さらに小河原(1997)は「ザ」と「ジャ」の音の長短を基準とする学習は正答率が低く、この基準は無意味であると述べた。また自己再認の実験を行い、つまり聴き取れば発音ができるというのは自分自身の発音が聴き取れる場合に限ることを明らかにした。

丸島他5名(2011)は、聞き分けている際の韓国人日本語学習者と日本語母語話者の脳波の観察により、「ザ」「ジャ」音を区別ができない学習者が、音のカテゴリー判断はできなくても物理量の違いは認識されていると、その聞き分けの可能性を述べた。

### 2-2 口蓋化について

韓国語話者の発音の特徴を11項目にまとめた松崎(1999)は、日本語の拗音と直音の対応のように、韓国語において口蓋化された音と口蓋化されない音が対応するため、拗音はたやすく習得されるが、韓国語には[tsu]や[dz]の音が存在しないため「ツ」と「チュ」、「ザ」と「ジャ」の区別は難しいと述べている。

韓国語話者の英語音声と日本語音声の聞き取り発音調査を実施した中東(1998)は、複数の音声資料を対照言語学観点から分析し、韓国語話者の英語音声と日本語音声の特徴および教育上の問題点を明らかにした。[[d]s]と[[d]ʒ]の識別と/z/の発音については共通して問題となると述べ、語頭無声閉鎖音/p/、/t/、/k/と有声閉鎖音/b/、/d/、/g/について、英語では容易であるが、日本語では難しいというような、目標言語にある同じ音韻的特徴が、両方の言語で同じように母語の干渉を起こすわけではないことを明らかにした。そして、日本語話者の英語音声/z/-/dʒ/について zoo と Jew を調査比較し、日本語話者は日本語に音韻論的対立のない/z/-/dʒ/を、非口蓋化と口蓋化音という日本語に存在する対立に置き換えて識別しているが、韓国語には/z/も/dʒ/がないため、非口蓋化と口蓋化の対立として捉えることができないとして、韓国語話者は/z/と/dʒ/の識別率が低く、両者を区別できない原因はここにあるとした。

発音時の舌と口蓋の位置については、司空(2004)がパラトグラフを用いた実験音声学的手法を用いて、韓国語話者と日本語話者の「ザ、ズ、ゾ」と「ジャ、ジュ、ジョ」を発音したときの、

最大接触時点における舌と口蓋の接触パターンについて観察分析を行った。そして、「ザ」の調音における、韓国語話者と日本語話者の最も顕著な違いは、歯茎部の接触パターンであるとし、「ジャ行音」「ザ行音」の調音位置について、日本語話者の場合は歯茎硬口蓋部の役割が非常に重要であるが、韓国語話者の場合、歯茎硬口蓋部の接触パターンから両分節音を区別できるほどの差が観察されなかったことから、明らかに異なることを検証した。電子口蓋図を用いて調音的側面の検証を行った研究は司空(2004)が最初である。

### 2-3 「ツ」について

韓国語母語話者の「ツ」の発音について、先行研究によれば、以下のような指摘がある。日本語の[*cu*]は韓国語にない音素であるため [*tʃu*]のような近似した音で発音されやすく、また同じ歯茎音の[*s*]を代用してしまう(酒井 2007)。「ツ」は韓国語の子音音素に存在しないため、一般的に韓国語の「ㄷ」、「ㅌ」いずれかの音を選ぶ傾向がある(金 2007)。「ツ」は韓国人が克服するのに最も難しい発音の中のひとつであり、日本語の「ツ」と類似している韓国語の音は「ㄷ」「ㄷ」であり、「ㄷ」は調音点と同じであるが、調音法は異なり、「ㄷ」「ㄷ」は調音法が同じであるが、調音点は異なる音である(関 2008)。

外国語学習において、学習者が母語にない目標言語の音を、母語にある調音点、調音法に近い音で代用することは一般的に知られており、韓国人学習者が日本語の「ツ」を韓国語の音「ㄷ」、「ㄷ」で代用することは予想される。

酒井(2007)はパラトグラフを用いた動態口蓋図により、日本語の破擦音は舌の第一列、第二列から接触が始まっているが、韓国語の破擦音の場合、第一列は全く接触せず、舌の側面の接触が広く長く、この点と破擦音の持続時間の長さの違いが誤用の原因となっていることを明らかにした。また関(2008)は、上級者レベルの学習者には[*tsu*]と[*dzu*]の発音に問題のない学習者がいたことから、[*tsu*]と[*dzu*]の発音は一度習得してしまえば、安定的に正しい発音ができるものと思われる述べ、「ツ」をそれらしく発音するための要領として、まず「ㄷ」の発音の準備をして、舌の先を歯茎にすばやく当てて外しながら「ツ」を発音する方法を提示している。この指導法は国際交流基金『音声を教える』(磯村 2009)で提案された方法と一致する。

### 2-4 有声・無声の問題点

語頭の破裂音については見解が分かれる。福岡(2008)は韓国人学習者の日本語破裂音の知覚生成を調査し、語頭の無声破裂音の知覚については濃音と聞くことに、語頭の有声破裂音を生成する場合は平音と同一音と捉えることに問題があったとしたが、金(2011)は、語頭破裂音について、有声無声を平音激音の対立としてとらえ、有声音は常に平音に近く、無声音は場合によっては平音に近いと判断されるため誤用につながるとした。また、柳澤(2006)は、韓国語では語中の無声音が有声音に挟まれると有声化する規則があるため、それを避けるために韓国語の濃音で代用するため、日本語話者の耳には、代用された濃音が促音が挿入されたように聞こえる(梅田 1985、関 1987)とした。

油谷(2005)は、有声音に続く平音のㄱ, ㄷ, ㅂ, ㅅが有声音化して[*g*]、[*d*]、[*b*]、[*dʒ*]で発音され

るのであるから有声音化は順行同化であり、有声無声が等しくなる声の同化であるとし、韓国語においては日本語の連濁のような現象が絶えず起こっていると考えるとわかりやすいと述べている。また、「간다」(行く)、「안간다」(行かない)の「간」は日本人には別の音に聞こえ、音声学的にも全く別の音であるが、韓国人には全く同じ音であり、同じ音として認識しているからこそ同じ「ガ」という文字で表記しているとした。さらに韓国語学習において、日本で出版されている韓国語の教科書には必ず有声音化に関する説明があるが、韓国の大学付属機関の韓国語教育機関で使用されている教科書には有声音化の説明が不足している例を挙げ、日本人にとって有声音化が重要なのは、有声音と無声音は別の音素に属しているからであると述べた。

## 2-5 表記への影響

発音の問題は表記に結びつく。姜(2006)は、中上級以上の韓国人学習者の日本語作文の表記に現れる誤用の実態を分析し、母語音声からの干渉と先行研究との比較を行った結果、従来の研究で習得困難であると言われる清濁の誤用と比べて長母音の誤用が多く見られたことを明らかにし、正確性を高めるためには、音声教育と作文教育の連携による教育の必要性を述べた。関(2009)も韓国人学習者の日本語作文に見られる誤用を分析し、作文における音声上の誤用は母語の干渉の度合いが大きく、誤用の項目の音声教育に力を入れる必要性があるとした。

兼脇、都(2009)は、習得困難な項目として外来語表記とカタカナ表記を挙げ、語彙レベルの外来語表記における誤用が起きるのは韓国語の音韻体系の強い影響であり、長音表記や清濁表記は初級者だけでなく上級者にとっても、習得困難な項目の一つであると述べている。

## 2-6 音声教育の重要性

音声教育の実践研究について、河野(2007)は、日本語習得研究が日本語教育現場での指導に対する基礎研究とされることについて、習得研究の成果を指導に生かすだけでなく、指導に生かすために習得研究を行うことが必要であると述べている。

小河原(2001)は、日本語の発音指導、矯正場面における学習者の不安の実態を明らかにするため、タイ人大学生を対象に調査分析した結果、不安要因の一つとして、発音学習改善のための発音学習スキルの欠如を挙げることで発音指導の不足を指摘し、日本国内外における日本語音声教育の重要性を強調している。

## 2-7 韓国語話者の日本語の発音

母語なまりのある日本語について、外国人の日本語に対する一般の日本人による視点や評価の調査によれば、学習者のレベルが高くなるにつれて、間違いや不自然さに対して寛容度が低くなる(原田 1998)が、外国語教育の発音指導をどこまですればよいかについて、恩塚(1997)は、韓国語話者によって発音された日本語を日本語話者に評価させ、発音指導上の優先順位や伝達を妨げるものについて考察した結果、有声音と無声音の弁別の重要性を明らかにした。そして韓国語話者特有の幼児発音は、話者の日本語が流暢で知的であるほど受け手にはその落差が奇異に感じられ、からかわれているような感情的わだかまりを残すことになり、他の誤発音より感情的違和

感を持つ日本人が多いと述べた。

金、六笠(2004)も外国人学習者にあまり接したことがない日本人の聞き手にとって、子供っぽい印象を与える要因の一つになるため、効果的な発音練習の必要性があると述べている。芹澤(2010)は、「ツ」や「ザ行」の口蓋化するために生じる誤用について、口蓋化した子音は日本語の拗音にあたるため、日本語母語話者には日本語母語話者の発音と聴覚的に大きく違うものとして認識され、日本語母語話者の評価を下げると述べた。

日本語の「国際化」が進んでいることについて、土岐(1994)は、国際化が進んでいる分だけ聞こえが異なるタイプの日本語を耳にすることになるが、それなりに偏見なく理解し評価するためには日本語の使い手に対してしなやかな意識に変える働きかけが必要であり、「聞き手の国際化」が重要課題であるとした。だが、外国人が日本語を話すという事態にそれほど抵抗を示さなくなる日が来るまでにはかなり時間がかかると述べている。

### 3. 日本語と韓国語の音声・音韻の比較

#### 3-1 日本語の子音

日本語の子音は表1のとおりである。調音点で分類すると、両唇音、歯茎音、硬口蓋音、軟口蓋音、声門となり、調音法で分類すると、破裂音、摩擦音、破擦音、鼻音、弾き音、半母音となる。また声帯振動の有無により、有声音、無声音に分類される。本稿で問題としている子音は無声歯茎破裂音と有声歯茎摩擦音である。

表1 日本語子音体系<sup>i</sup>

| 調音点<br>調音法 | 両唇               | 歯茎                    | 硬口蓋     | 軟口蓋   | 声門 |
|------------|------------------|-----------------------|---------|-------|----|
| 破裂音        | p / b            | t / d                 |         | k / g |    |
| 摩擦音        | ϕ                | s / z                 | ʃ / ʒ   |       | h  |
| 破擦音        |                  | ts / dz <sup>ii</sup> | tʃ / dʒ |       |    |
| 鼻音         | m                | n                     | ɲ       | ŋ     |    |
| 弾き音        |                  | r                     |         |       |    |
| 半母音        | w <sup>iii</sup> |                       | j       | (w)   |    |

油谷(2005) 鶴谷(2008)を参考に筆者作成

表記は IPA(2005) による

日本語と韓国語の音韻および音声について比較すると、日本語の子音体系には存在し、韓国語の子音体系に存在しないため、韓国人日本語学習者にとって習得困難であると予想される音素は、[ϕ]、[ts]、[dz]、[z]、[ʒ] の5つである。また日本語の「ザ行音」「ジャ行音」「タ行音」「チャ行音」「ダ行音」の分布は表2にまとめられる。

表2 日本語のザ行音 ジャ行音 タ行音 チャ行音 ダ行音の出現

| 後続母音 |    | a           | i           | u           | e           | o           |
|------|----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| ザ行音  | 音素 | za          | zi          | zu          | ze          | zo          |
|      | 語頭 | [dza]       | [dzi]       | [dzu]       | [dze]       | [dzo]       |
|      | 語中 | [za]([dza]) | [zi]([dzi]) | [zu]([dzu]) | [ze]([dze]) | [zo]([dzo]) |
| ジャ行音 | 音素 | zja         | —           | zju         | —           | zjo         |
|      | 語頭 | [dza]       | —           | [dzu]       | —           | [dzo]       |
|      | 語中 | [za]([dza]) | —           | [zu]([dzu]) | —           | [zo]([dzo]) |
| タ行音  | 音素 | ta          | chi         | tsu         | te          | to          |
|      |    | [ta]        | [tci]       | [tsu]       | [te]        | [to]        |
| チャ行音 | 音素 | cha         | -           | chu         | che         | cho         |
|      |    | [tca]       | —           | [tɕu]       | [tɕe]       | [tɕo]       |
| ダ行音  | 音素 | da          | dji         | dzu         | de          | do          |
|      | 語頭 | [da]        | [dzi]       | [dzu]       | [de]        | [do]        |
|      | 語中 | [da]        | [zi]        | [zu]        | [de]        | [do]        |

フォン (2006) を参考に筆者作成

日本語の「ザ行音」「ジャ行音」は語頭または促音や撥音の後は破擦音、語中では摩擦音となる傾向がある。つまり、ザ行音「ザ」「ズ」「ゼ」「ゾ」の子音は語頭または促音や撥音の後では有声歯茎破擦音、語中では有声歯茎摩擦音で発音される。だが日本語話者はザ行の子音が異なる音であることは意識していない。また、「ジャ」「ジュ」「ジェ」「ジョ」の子音は「ザ」「ズ」「ゼ」「ゾ」の調音点が少し後ろにずれて発音される。ジャ行音の子音についても日本語話者には異なる音としての意識はないが、ザ行音とジャ行音の子音については聴覚的に異なる。つまり、日本語話者にはザ行音とジャ行音の、破擦音、摩擦音という調音法で意味に結びつく弁別機能はないが、口蓋化するかどうかという、調音点の違いにおいては意味の違いに結びつく弁別機能が働いている。

### 3-2 韓国語の子音

韓国語の子音も日本語の子音と同様に調音点で分類すると、両唇音、歯茎音、硬口蓋音、軟口蓋音、声門となり、調音法で分類すると、破裂音、摩擦音、破擦音、鼻音、弾き音、半母音となる。韓国語には日本語に存在しない側面音がみられる。韓国語の破裂音や破擦音には清音、濁音の区別はなく、平音、濃音、激音の区別がある。

また韓国語には語頭の有声子音は存在せず、初声として使われる平音は、母音に挟まれるか、鼻音や流音に続くときは発音が変化する。韓国語には歯茎破擦音は存在せず、歯茎摩擦音に関して有声歯茎摩擦音はない<sup>iv)</sup>。学習者が陥りやすい拗音化した音は硬口蓋破擦音として存在することが確認できる。しかし韓国語話者には語頭の清音と語中で有声音化した濁音は同じ音として聞こえる。なぜならそれらは条件異音であり、平音が語頭と語中では異なることは意味の区別に

関わらないからである。したがって韓国人学習者にとって語頭の濁音、語中の清音は習得困難な項目の一つとなっている。

表3 韓国語子音体系

| 調音点<br>調音法 | 両唇                                | 歯茎                                | 硬口蓋                                   | 軟口蓋                               | 声門    |
|------------|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|-------|
| 破裂音        | ㅍ p/b<br>ㅂ ?p<br>ㅍ p <sup>h</sup> | ㄷ t/d<br>ㄸ ?t<br>ㅌ t <sup>h</sup> |                                       | ㄱ k/g<br>ㅋ ?k<br>ㆁ k <sup>h</sup> |       |
| 摩擦音        |                                   | ㅅ s<br>ㅆ ?s                       | ㅈ <sup>v</sup> ʃ<br>ㅉ ?ʃ              |                                   | ㅎ h/f |
| 破擦音        |                                   |                                   | ㅊ tʃ/dʒ<br>ㅌ ?tʃ<br>ㅊ tʃ <sup>h</sup> |                                   |       |
| 鼻音         | ㅁ m                               | ㄴ n                               | ㄹ <sup>vi</sup>                       | ㅇ ŋ                               |       |
| 弾き音        |                                   | ㄹ <sup>vii</sup> r                |                                       |                                   |       |
| 側面音        |                                   | ㄹ l                               |                                       |                                   |       |
| 半母音        | w                                 |                                   | j                                     | (w)                               |       |

油谷 (2005) を参考に筆者作成

表記は IPA (2005) による

#### 4. 調査

##### 4-1 調査の目的

本研究は、韓国人学習者の苦手とする日本語の音声について生成調査を実施し、最も習得困難な音を検証し、生成調査の結果をもとに作成した聴取調査により、問題の音の難易度と原因、および学習者の識別基準を明らかにする。

##### 4-2 生成調査

生成調査は韓国慶尚道の日本語学習者を対象に、韓国人学習者が苦手とする有意味語 33 語を「発音テスト」として、K 山高校の教室で一人ずつ実施した。発音テスト問題の語を読み上げている、学習者ひとりひとりの映像を撮影したデータを収集した<sup>viii</sup>。

被験者は韓国慶尚道の K 山高校で「日本語」を学習している韓国語を母語とする男子高校生 91 名である。91 名中 14 名は 3 学年生徒であり、日本語学習歴については 1 年以上である。91 名中 77 名は 2 学年生徒であり、学習歴 5 か月である。

##### 4-3 生成調査の語

調査語 33 語には、「ツ」に関する 1 語、「長音」に関する 2 語、「撥音」に関する 4 語、「促音」に関する 2 語、「清濁」に関する 16 語、「ザ行」に関する 5 語および「ㅎ脱落」に関する 3 語が含まれる。具体的な語は表 4 に挙げた。

調査の手順は、教科書「高等学校日本語1」の練習問題である「注意すべき日本語」の語を発音テストとして一語ずつ読み上げている動画データを、1順目は一通り聞き、2順目は予想された「間違えやすい例」になっているかどうかポイントを置いて聞いた。そして「個人評価表」を作成し、一人一人に対して正誤を評価した。「個人評価表」については韓国人日本語教師と正誤を確認した後、学習者に注意点を伝えて授業に役立てた。

#### 4-4 聴取調査

聴取調査では、生成調査の結果から検証された、学習者が習得困難とする音声について有意味語の聴き取り用のミナマルペアを作成し、二者択一式で実施した。調査は一次調査（2012年3月実施）、二次調査（2012年8月実施）と2回実施した<sup>18</sup>。

被験者は韓国慶尚道の高校生355名である。K電子工業高校生徒は160名を対象に、1次調査105名、2次調査55名、最初の授業であったため、ひらがな未学習である。一方、K山高校生徒56名は日本語学習時間が1年以上あり、Y川女子高校生徒139名共に日本語学習時間1年以上であった。

#### 4-5 聴取調査の語

調査語は、生成調査の結果から学習者にとって習得困難であると考えた、「ツ」と「ザ行」のミナマルペアである。どのような音環境で聴取の難易度が高くなるのかを検証するため、語頭「ツ」3ペア、語中「ツ」4ペアとし、「ザ行」については、語頭5ペア、語中1ペア、語末2ペアとした。また後続母音による難易度を検証するため、「ザ」、「ズ」、「ゼ」、「ゾ」について各2ペアとした。そして特殊音の長音、撥音、促音の後となるように、後続子音に関しても/s/、/k/、/g/、/m/、/k/と、それぞれ重複しないように語を選んだ。ただし、韓国人学習者の発音の傾向の分析をするため、有意味語でない「じえんか」も調査語として入れた。

調査は、K電子工業高等学校、K山高等学校、Y川女子高等学校の日本語の授業時間に各教室で実施した。聴き取りの発音テスト問題は日本語母語話者である調査者が読み上げた。すべての生徒が書き取ったことを確認しながら、各単語をゆっくり3回ずつ読んだ。そしてその単語を聴き取ったとおりにハングルで書き取りをさせた。さらにその後どちらか一方の単語を2回ずつ読み、読み上げた側の語を丸で囲むよう指示した。

### 5. 結果と考察

#### 5-1 生成調査の結果

調査の結果、生成の最も困難な音は「つ」であった。「つくえ」が正確に発音できなかったものは、91名中45名であった。「つぎのひ」の教科書の予想は「ひ」の音の「ㄷ」音脱落であり、「つぎのい」と発音することであったが、教科書の予想とは異なり、「つぎのい」とはならなかった。「つくえ」が困難である原因として、「つ」に後続する音の母音の影響が考えられる。日本語の/w/は前後の子音の調音に影響を受けやすい(フォン2006)ため、[tsu]+[ku]+[e]と[tsu]に[u]が後続する場合、母音[u]の影響を受け、「ちゅ」と拗音になる傾向が高いと推測する。



表4 生成テスト結果

| 正しい発音   | 誤答 | 誤用例 (人数)                 | 誤用の項目       |
|---------|----|--------------------------|-------------|
| つぎのひ    | 46 | ちゅぎのひ(12) っつぎのひ(34)      | 無声歯茎破擦音「ツ」  |
| つくえ     | 45 | ちゅくえ(26) っつくえ(18) ちくえ(1) | 無声歯茎破擦音「ツ」  |
| どうぞ     | 37 | どうじょ(37)                 | 有声歯茎摩擦音「ザ行」 |
| ごはん     | 24 | ごあん(11) ごーはん(12) ごばん(1)  | ㄱ脱落 長音      |
| どこ      | 11 | どーこ(11)                  | 長音          |
| ごうかく    | 9  | ごうがく(4) ごかく(3) こうがく(2)   | 清濁 長音       |
| でんわ     | 7  | てんわ(6) でんあ(1)            | 清濁          |
| きんようび   | 4  | ん(弱)(4)                  | 撥音          |
| こうこう    | 3  | こっこう(2) こうこう(1)          | 長音          |
| して      | 3  | しで(3)                    | 清濁          |
| にほんへ    | 2  | にほんえん(2)                 | 撥音          |
| おはよう    | 2  | おあよう(2)                  | ㄱ脱落         |
| だれ      | 1  | たーれ(1)                   | 清濁          |
| がっこう    | 1  | がっこ(1)                   | 長音          |
| ゲームセンター | 1  | げむ(1)                    | 長音(外来語)     |
| だいがくせい  | 1  | だいかくせい(1)                | 清濁          |
| ぼく      | 1  | ぼーく(1)                   | 長音          |
| バナナ     | 1  | ばなーな(1)                  | 長音          |
| せんえん    | 1  | ん(弱)(1)                  | 撥音          |
| みて      | 1  | みで(1)                    | 清濁          |
| にほんご    | 1  | ひほんご(1)                  | ㄱ脱落         |
| じゅぎょう   | 1  | じゅうぎょう(1)                | 長音          |

注：表中の数値の単位は人数

## 5-2 聴取調査の結果

正解率には一定の傾向があり、K電子工業高校とK山高校の順序においては「ツ」、「ザ行」共、ミニマルペア正解率の順序がすべて一致した。3校とも「ツ」より「ザ行」の正解率が低い結果となった。3校の平均点(K電子工業高校9.65 K山高校11.00 Y川女子高校11.0)に差が生じたのは、学習時間の影響で、日本語学習時間が長い生徒は正解率も高い。

表5 正解率の比較

| ミニマルペア |       | K電子(1次) | K山 | Y川 | K電子(2次) |
|--------|-------|---------|----|----|---------|
| つうしん   | ちゅうしん | 69      | 77 | 80 | 69      |
| ざま     | じゃま   | 56      | 64 | 70 | 47      |
| つうこく   | ちゅうこく | 79      | 82 | 88 | 75      |
| ずかん    | じゅかん  | 76      | 91 | 81 | 89      |
| つうがく   | ちゅうがく | 87      | 96 | 89 | 85      |
| ぜんか    | じえんか  | 12      | 16 | 27 | 33      |
| むつう    | むちゅう  | 81      | 89 | 90 | 89      |
| ぞうきん   | じょうきん | 56      | 64 | 71 | 62      |
| かんつう   | かんちゅう | 85      | 96 | 92 | 96      |
| ぜっと    | じえっと  | 19      | 21 | 24 | 31      |
| こうつう   | こうちゅう | 83      | 95 | 89 | 89      |
| せいざ    | せいじゃ  | 43      | 54 | 53 | 51      |
| じゅず    | じゅじゅ  | 71      | 91 | 86 | 96      |
| にっつう   | にっちゅう | 82      | 93 | 92 | 91      |
| かんぞう   | かんじょう | 66      | 70 | 75 | 67      |

注：表中の数値の単位は%

### 5-3 後続する音の影響

「ツ」において最も正解率の低い「つうしん ちゅうしん」と、正解率の高い「つうがく ちゅうがく」の難易度の原因は、後続する音の影響であると考えられる。「つうしん ちゅうしん」の後続する音は「し」の音に聴取困難の原因がある。「し」は無声歯茎硬口蓋摩擦音であり、「イ段」であるため口蓋化した音である。尚「イ段」音について、日本語の「イ段」の子音の調音点はすべて他の段と大きく異なり、これが日本語の発音の特色であり拗音に結びつく（猪塚元、猪塚恵美子 2007）。学習者が「ツ」の音を「チュ」と発音する原因は舌の位置が奥の方にずれること、つまり口蓋化することである。口蓋化した「イ段の音」が後続することが学習者の聴き取りにも影響を与えている。

これに対して「つうがく ちゅうがく」の聴き取りの正解率が他のミニマルペアと比べて高かったのは、後続する音「が」にあることとなる。韓国語にも[k]、[g]の音は存在するが語頭では無声音、語中では有声音で発音される。「つうこく ちゅうこく」の「こ」の子音である[k]は韓国語であれば[g]と変化する。「つうこく ちゅうこく」は韓国語の音規則では「つうごく ちゅうごく」と語中で有声音化して発音することが自然である。

この理由から、「つうこく ちゅうこく」と「つうがく ちゅうがく」は共に後続する音が[k]、[g]であるが、前者は韓国語の音規則に反する語中の清音であるため難しく、後者は韓国語の音規則どおり語中で濁音、すなわち有声音であるため易しいという、難易度に差が出たと考える。

#### 5-4 学習者の識別基準

学習者は母語の表記法ハングルで、日本語の音「ツ」と「チュ」を認識区別する傾向があり、子音で区別しているもの、母音で区別しているもの、子音母音の両方で区別しているものが聴取調査の回答に見られた。

|             |       |     |        |     |     |
|-------------|-------|-----|--------|-----|-----|
| 区別の基準となった子音 | ツ (ㄷ) | (ㅌ) | チュ (ㄷ) | (ㅌ) | (ㅈ) |
| 区別の基準となった母音 | ツ (ㅡ) | (ㅣ) | チュ (ㅜ) | (ㅠ) | (ㅣ) |

「ザ行」と「ジャ行」についても、学習者はハングルで区別しており、正解した答案のハングル表記の多くは「ザ」は「자」、「ズ」は「즈」または「주」、「ゼ」は「제」または「재」、「ゾ」は「조」、「ジャ」は「자」、「ジュ」は「주」または「쥬」、「ジェ」は「제」、「ジョ」は「조」であった。

|        |          |          |        |
|--------|----------|----------|--------|
| ザ (자)  | ズ (즈 주)  | ゼ (제 재)  | ゾ (조)  |
| ジャ (자) | ジュ (주 쥬) | ジェ (제 재) | ジョ (조) |

難易度は後続母音の影響があると考えられる。ザ行の正解率は、ズ>ゾ>ザ>ゼの順となり、「ゼ」の正解率が極めて低いことが明らかになった。「ザ行」における学習者の難易度の原因は、ハングルに日本語の音を識別できる文字が存在するかどうかにある。また語頭に比べて語中の識別が困難であることがわかった。

#### 6. 結論

本研究の被験者に関しては以下のことが明らかとなった。韓国人学習者にとって最も習得困難な音は「ツ」と「ザ行」であり、音の難易度は生成と聴取では異なる。また「ツ」と「ザ行」の、生成聴取における困難な原因に音環境の影響がある。「ツ」と「ザ行」のクラス別正解率には正の相関がみられ、「ツ」の聴き取りの正解率が高いクラスの生徒ほど、「ザ行」の聴き取りの正解率も高くなる傾向が示された。また学習者が聴き取りの識別基準とするハングルが明らかとなった。学習者にはハングルの干渉があると結論できる。

日本語のハングル表記は、韓国国立国語院 によって定められた規則に従っており、NHKのハングル講座テキストでは、ひらがな「ツ」に対応するハングルは「쓰」に統一されている。しかし韓国で使用されている日本語の教科書における「ひらがな 50 音図」の「ツ」の読み仮名は統一されていない。ハングルで「쯔」と表記があるもの、ハングルとローマ字で[tu]「쯔」、[tsu]「쯔」と表記してあるもの、ローマ字のみの振り仮名 [tsu]、音声記号を表記してあるもの[tsu]、など様々である。ひらがなカタカナ表の表記は「쯔」であるが、本文中の読み仮名のハングルは「쓰」を使用しているという、同じ教科書の中でも統一性がないものも見かける。

ところが学習者が聴きとったとおりに表記したハングル「쯔」、「쥬」、「쯔」、「쥬」は、教科書に表記されたハングル以外のものであった。「ツ」を「쯔」や「쥬」とハングル表記した教科書は筆者の知る限りでは見当たらないが、この表記について検討する価値がある。また、困難の原

因は「ツ」の子音だけでなく、母音[u]も困難の原因となる要素がある。日本語の母音「ウ」に近い韓国語の母音として、「우」「으」が存在するが、日本語の「ウ」とは異なる。口を丸めて突き出して発音する「우」と口を横にひいて発音する「으」は韓国語では意味の違いが生じるが、日本語には意味の違いは生じない。

ハングルは科学的かつ合理的な文字であり、韓国語の表記に関しては極めて優れた文字であるが、日本語の音を正確に表記することはできない。「ツ」「ザ行」だけでなく、長音、濁音についても標準的表記法で正確に表すことはできないため、ハングルで音を認識している学習者には混乱が生じる。学習者の音声習得の場においては母語の干渉、言い換えればハングルの干渉が起きている。

ハングルは音素文字のため音の表記が可能であるが、そもそも韓国語には日本語の「ツ」や「ザズゼゾ」に該当する音は存在しないため、日本語の「ツ」の音をハングルに存在する近い音で置き換えることには無理があり、置き換えた音が学習者の日本語らしい発音習得の妨げになる。したがって、これを基準に練習するとハングルなまりの音になってしまう恐れがある。

## 7. 今後の課題

今後の課題として、効果的指導法を提案する。「日本語」の授業で、ひらがなの練習を始める時にしっかり文字と音声をつなげることを目標にすべきである。つまり、異音を含めた日本語の単語発音練習により、学習者に50音の音声を完全に定着させることが必要である。ひらがなの学習を終えたら、ミニマルペアを用いて注意すべき日本語の発音について違いを体感させる。調音点や調音法の違いについては、口腔断面図を用いて舌の位置や形、口の中の動き、息の出方などを説明し、口蓋化した音との違いを学習者に意識させる。ポイントは、舌の位置であることを注意する。舌を広げず、少しとがらせて上歯にくっつけ、素早く放して音を出すように説明する。舌が広がって盛り上がり、上歯より後ろにずれると「チュ」になってしまうことを教師が手本を示してから学習者にも発音させる。また舌の形は同じでも、舌と上歯に隙間がある場合は「ス」になることを体感させる。

さらに学習者が代用音として示したハングルを例として挙げて、ハングルにも似た音があるが、日本語の「ツ」とは異なることを説明する。「ㅌ」は舌と歯を付けて、破裂させるように素早く多くの息を強く出す音であるが、「ツ」は舌と歯が摩擦するように息を出す音であり、息の量と強さは「ㅌ」ほど多く強くない、と2つの音の相違点を説明する。「스」「ㅌ」「ㅍ」を発音するときの舌の位置は「チュ」と同じで「ツ」を発音するときと比べ、舌が広がって盛り上がり、上歯より後ろにずれる音であるため「チュ」と聞こえてしまうので注意が必要であることを伝える。「ツ」が「チュ」とならないためには後続母音、つまり[u]が「ㅌ」ではなく「ㅡ」に近い音であること、すなわち「口を丸めない」ことも注意する。その後ミニマルペアを用いて、問題となる音との違いを再び体感しながら発音練習をする。

練習の目的は学習者に独自の基準を持たせることである。基準ができた学習者には各自の基準の発表をさせると他の学習者の参考になる。学習者によって異なる、複数の基準が提案されるこ

とも予測される。さらに学習者には自分の発音している姿を鏡などで確認させたり、ペアワークをさせたりして練習すると効果的である。「ツ」が「チュ」とならないための注意点は、舌は広げない、上歯につけて素早く放す、口は丸めない、ことである。

#### 注

- (1) 表1、表3において、無声音(左)と有声音(右)の表記を示したものがある。
- (2) 油谷(2005)の分類では[dz]は[dz]歯茎破擦音に分類されているが、歯茎硬口蓋とするのが一般的である。
- (3) 梅田(2004)によれば、[w]は軟口蓋音に分類されている。
- (4) 油谷(2005)は国際音声学会(2003)のハ[s]が[z]と有声化するという記述に関して、現代韓国語において[s]は決して有声化しないため誤りであると指摘している。
- (5) ハ/ハ については見解が分かれる。油谷(2005)では硬口蓋にも分類されている。
- (6) [ɲ]についてはハ[ɲa]と現れる。
- (7) 流音ㄹは母音の間では[r]として実現され、音節末(パッチムの位置)では[l]として実現される。  
(梅田(2004)『韓国語概説』p71 引用)
- (8) 生成調査は2011年7月4日から7月21日の放課後に実施された。協力者は「慶尚北道日本語教師研究会」を運営している、K山高校の韓国人日本語教師である。
- (9) 二次調査では1次調査で読まなかった側の単語を読み上げた。

#### 参考文献

- 李翊燮・蔡婉・李相億(2004)『韓国語概説』梅田博之監修 前田真彦訳 大修館書店
- 磯村一弘(2009)国際交流基金『音声を教える』日本語教授法シリーズ2
- 猪塚元・猪塚恵美子・町田健(編)(2007)『日本語音声学のしくみ』研究社
- 梅田博之(1985)「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する韓国語教育」『日本語教育』55, pp. 48-58
- 小河原義朗(1996)「韓国人日本語学習者の日本語破裂音の発音と聞き取りの関係について」『東北大学文学部日本語学科論集』6, pp. 13-22
- \_\_\_\_\_ (1997)「日本語発音学習における学習者の自己評価」『言語科学論集』1, pp. 27-38
- \_\_\_\_\_ (2001)「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み—タイ人大学生の場合—」『世界の日本語教育日本語教育論集』11, pp. 39-53
- 恩塚千代(2011)『日本語の音韻認識と表記のメカニズム』인문사
- 鹿島央(2010)『基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク 第1章, pp. 16-81
- 兼脇涼子・都恩珍(2009)「韓国人日本語学習者の作文における母語の影響」『桜花学園大学人文学部研究紀要』11, pp. 79-90
- 姜枝延(2006)「韓国人学習者の日本語の文字表記に見られる音声項目の誤用」杏林大学大学院国際協力研究科『大学院論文集』3, pp. 23-34
- 金海実・六笠恵美子(2004)「コミュニケーションのための発音指導—韓国語母語話者を対象として—」『早稲田大学日本語教育実践研究』1, pp. 99-108
- 金珍娥(2007)「韓国語のローマ字表記法」『韓国語教育論講座』1, pp. 387-418 くろしお版
- 金周熙(2011)「韓国語母語話者は無声・有声の対立をどう捉えるか」

- <<http://www.gsja1.jp/toda/dat/kenkyuukai0709.pdf>> (2011年12月24日)
- 河野俊之(2007)「指導に生かすための研究」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14, pp. 95-112
- 司空煥(2004)「韓国語話者による『ザ行音』の調音的特性に関する研究—パラトグラフィによる分析から—」『電子情報通信学会技術研究報告』SP, 音声 104(148), pp. 5-10,
- 酒井真弓(2007)『韓国語話者の日本語音声考—韓日両国語の比較から』제이앤씨
- 芹澤有美(2010)「アクセント・単音の正誤と単音の種類が母語話者評価に与える影響—韓国語を母語とする日本語学習者の発音を対象に—」
- <[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/diss/H22M\\_SerizawaYumi.pdf#search=%E8%8A%B9%E6%BE%A4%E6%9C%89%E7%BE%8E](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/diss/H22M_SerizawaYumi.pdf#search=%E8%8A%B9%E6%BE%A4%E6%9C%89%E7%BE%8E)> (2012年1月26日)
- 鶴谷千春(2008)『第二言語としての日本語の発音とリズム』溪水社
- 土岐哲(2010)「第15章 音声研究と日本語教育」「第16章 聞き手の国際化」『日本語教育からの音声研究』ひつじ書房, pp. 223-245
- 戸田貴子(2010)第1章「日本語音声の研究と教育における課題」第2章「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp. 23-41
- 中東靖恵(1998)「韓国語母語話者の英語音声と日本語音声」—聞き取り・発音調査『音聲學會會報』日本音声学会機関誌 2-1, pp. 72-82
- 原田明子(1998)「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』2, pp. 157-168
- 福岡昌子(2008)「韓国人学習者の日本語破裂音の習得研究—知覚と生成のメカニズム」『三重大学国際交流センター紀要』2, pp. 13-22
- ファム トゥー フォン(2006)「ベトナム語母語話者による日本語のザ行音・ジャ行音・ヤ行音の聞き分け」『日本言語文化研究会論集』2, pp. 83-108
- 松崎寛(1999)「韓国語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』3-3, pp. 26-35
- 丸島歩・切越舞・二ノ宮崇司・渡辺和希・早川友里恵・福盛貴弘(2011)「韓国人日本語学習者における「ザ・ジャ」音の識別」『言語学論叢』3, pp. 57-73
- 関光準(1987)「韓国人の日本語の促音の知覚について」『日本語教育』62, pp. 179-193
- \_\_\_\_\_ (2008)『일본어 음성학 입문』 건국대학교출판부
- \_\_\_\_\_ (2009)「韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉」
- <[http://jpforlife.jp/pdf/pr\\_01-12\\_mgj.pdf#search=関光準 韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉](http://jpforlife.jp/pdf/pr_01-12_mgj.pdf#search=関光準%20韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉)> (2011年8月1日閲覧)
- 柳澤恵美(2006)「韓国語母語話者の日本語発話に見られる促音挿入の傾向」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 Bulletin of Japanese Language Center for International Students 32, pp. 91-107
- 油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』白帝社
- 김숙자(2007)『일본어 음성교육』제이앤씨

**参考にした日本語教科書・韓国語教科書**

- 강경자 지음 온즈카치요 감수(2005) 『우키우키 일본어 Step1』 (주)넥서스 Japanese  
김숙자, 김태호, 아이자와유카, 권지인(2011) 『고등학교 일본어 I』 (주)미래엔  
김연수, 후루가소우 공저(2008) 『일본어 문법 기초 완성』 (주)진명출판사  
김영훈, 김희박, 신재훈, 임창규(2009) 『ありがとうア리가ト』 니혼고 팩토리  
장남호, 김우열, 최영숙(2003) 『고등학교日本語 I』 (주)시사영어사  
한미경, 津崎浩一, 조성범, 이용환(2002) 『고등학교 I 日本語』 (주)블랙박스  
이현기, 이한섭, 한중선(2001) 『고등학교日本語 I』 (주)진명출판사  
『韓国語マラソン』 テキスト 1 (2001) アルク  
『まいにちハングルハングル講座 4月号』 (2013) NHK出版  
『テレビでハングル講座 4月号』 (2013) NHK出版
-